

# 集落址理解への一試み

—エスノアーケオロジーからの示唆—

酒 井 龍 一\*

A note for studying of archaeological settlements:  
Some suggestions from ethno-archaeology

Ryuichi SAKAI

## はじめに

発掘される遠き過去 **ancient** の集落址の理解にむけて、考古学では様々な試みがされてきた。筆者も同様の主題をめざして論議を続けている（酒井1976, 1977, 1982A, 1982B, 1983）。

本稿では、いわゆるエスノアーケオロジー **ethno-archaeology** による集落調査の実例に学ぶことにより、いくつかの有効な示唆を得る。とりわけ、住居をはじめとする基本生活維持施設の配置や組み合わせに、それを形成する生活集団のいかなる実態が反映する例があるかを探索してみたい。

なお、これは「集落址からみる人間の精神構造—行為観察のチェックポイント」（『歴史公論』82）と題する先稿の続編をなす。

## 考古学における理解の三側面

そもそも、集落址についての考古学の理解は、全体として次の三側面から行なわれる。即ち、直接法・間接法・一般法である。

直接法は、対象とする集落址を調査・観察し、そこで得るデータに基づいてのみそれを理解する。理解の枠を少し拡大して、データから1次的に導き出せる推量もそれに組み込むことも可能である。考古学の方法として根幹をなす。厳密な立場にあっては、これが唯一と断言することもできる。

間接法は、当該集落址と諸レベルで関係する他集落址のデータや様相を引き合いに出し、それを採用することにより、直接法での理解を補う。関係する諸レベルには、同一地域・時代（型式・期・時代）・文化・あるいは同一機能・規模・その他がある。援用データとして最も信頼度合の高いのは、当該集落址と同一地域内に所在し、同一時代（型式）・同一機能・同一規模の集落址である。

一般法は、当該集落址とは、地域・時代・文化等の範囲を越えた全く無関係の他集落址データや様相を引き合いにだし、そこから理解に有効な示唆を得る。ただし、そこには前程となる認識と適用の制限が不可欠である。基本的には、時間的・空間的範囲の枠組を越えた両集落址間には何等の文化的 **context** は存しない。両者に共通項があるとすれば、

いずれもが「人間」の生活痕跡という最小の公約数にとどまる。それ故、ある集落址の理解に有効な援用データであっても、この公約数にかかわる論議を除いて、その実態をあてはめることは決してできない。本来、文化的 context の存しない無限の不特定多数の中から、当該集落址の理解に有効なものを主観的に選定することには正当な根拠はないと考えておくのが妥当であろう。

### 考古学の立場

遺構・遺物という物的資料でのみ構成される過去の集落址を観察の対象とする考古学では、そこに住った人々＝生活集団の実態に迄アプローチするには多くの作業工程を必要とする。例えば、詳細な土器型式の設定、共存遺構群の確定、各種遺構の用途機能の同定、住居址個々の有機的関係遺構の特定、その他多くの基礎的・中間的作業とその結果を媒介として、序々に生活集団の構成員や内部関係等その実態へと理解を積み重ねてゆく工程をとる。作業工程の数が多いため、「類推」の数も増加し、最終的に得られる結果の蓋然性は低くなることは言うまでもない。

更に、以下のような現実的制約も相まって、観察できる集落址データからそれを形成した生活集団へのアプローチは、なおまだ困難な現実にある。

遺構の著しい重複を一般的傾向とするわが国の先史時代諸遺跡を対象とする場合、真に共存した住居址群や遺構群を特定するのは先ず極めてむづかしい。対して、遺構の切り合い関係の多さから導き出せるだろう土器型式の細分化は、各遺構出土土器の微妙な時間差を観察しうることになり、今度は、真に共存したとする住居址や遺構が異常に少いという理解に達する危険性も高い。この状況の下では、住居址個々と有機的に結びつく諸施設を正確に特定する作業となると、更にむづかしくなるだろう。集落址全体の発掘事例が極端に少ないのも、直接法による理解を阻害する要因でもある。

こうした諸問題も含めて、障害を克服する方法論的な試みが行なわれつつあるが、当面は不確定でかつ限定されたデータに直面しつつ集落址、ひいては生活集団を理解してゆかざるをえない条件や考古学に課せられてゆく。この限りにおいて、間接法・一般法の果す役割は大きいものがある。

### エスノアーケオロジーの立場

現存 present の集落を調査の対象とするエスノアーケオロジーは、そこに住う人々をもまた観察しうる。故に、どのような集落形態がどのような生活集団により産み出されるのかという両者の実態と相互関係を、考古学ほど中間作業を経ずして、直接に把握できる。一時空に真に共存する住居群や関係諸施設の確定、各種施設の用途機能の同定等、具体的な問題だけでなく、それらの配置や組み合わせが生活集団の実態の何と関係しているかという、観念的な問題についても、かなりの精度で把握できる立場にある。

物的資料としての集落址の理解に先ず努め、それを踏えて背後にある生活集団にまでアプローチすべく試行錯誤を続ける考古学に、両者とも観察できるエスノアーケオロジーの立場から有効な示唆が提供できる可能性は高い。

### 現在集落——Hadza, Messa, Lozi——の調査

既存の調査から次の三事例を任意に選んで紹介する。

#### Hadza のキャンプ (図-1)

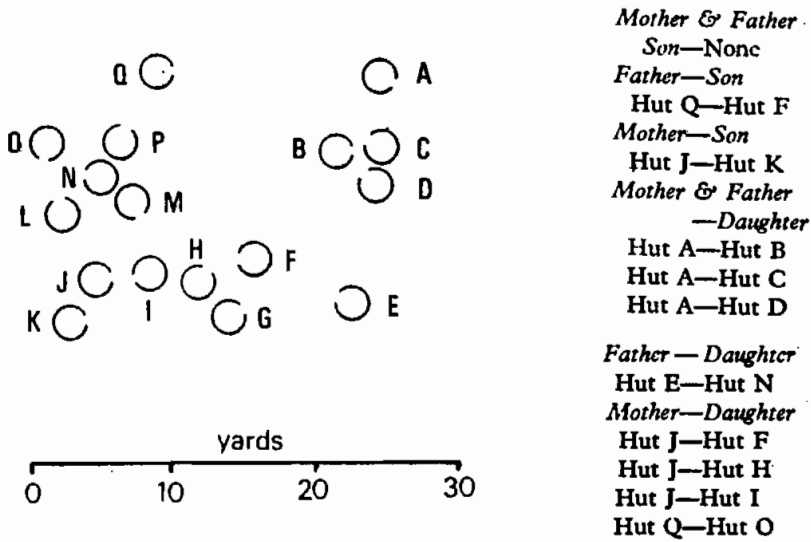


図-1 Hadzaのキャンプ (Woodburn 1972)

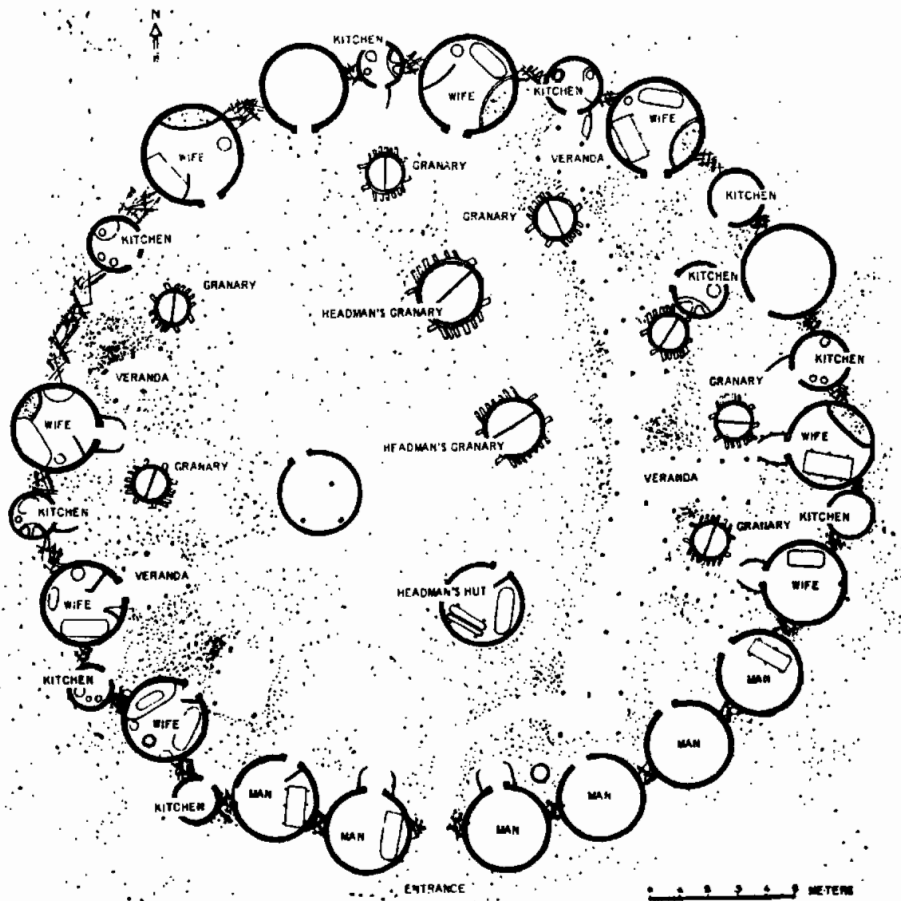


図-2 Messaの環状集落 (Fraser 1968, Flannery 1972)

J.C. Woodburn (1972) により調査された、北部タンザニア・ウグル所在の Hadza 設営のキャンプである。彼等はベースキャンプを持たない。

このキャンプは 20×30m 程度の範囲に設けられた17棟の住居小屋で構成されている。それらは3群に分かれて、全体では馬蹄形をなす。

小屋の配置と住人が調査され、次のような観察が得られた。

- ① 12棟の小屋には、一組の夫婦が住む（内5組は、6才位迄の子供と同居）。
- ② 5棟の小屋には、年長の子供・未婚の成人・配偶者がキャンプ内にいない既婚者達の中からの同性者が住む。
- ③ 親とその成人した子とは同居せず、キャンプ内の別小屋に住む。
- ④ 夫は、妻の母親のキャンプに住む。
- ⑤ 母親夫婦の小屋から5～10mの範囲内に、その既婚の娘（夫と同居）達の小屋が位置するが、その入口は決して母親の小屋には向けない。

この中で特に注目されたのは⑤の現像で、他成員達の可変的なあり方とは対象的に、一慣したパターンを示すことであった。同様の現像は、hadza の他のキャンプでも認められたと言う。Woodburn は、夫が妻の母に対し重要な義務（物品とサービスの提供）と強い回避関係（夫は、義理の母と直接に話をする事もなく、また、その名前を呼ぶこともない等）の両面を持つことから、それを、夫—妻—妻の母という三者に存する特異な関係が他とちがった住居配置に現われたものと理解している。

#### Messa の環状集落 (図-2)

カメルーンに所在し、D. Fraser (1968) に収録されている。K.V. Flannery (1972) が、先史時代の円形住居址を理解するのに引用している。

径30メートルの円形範囲に、18棟（内3棟は居住せずか）の住居・9棟の倉庫・10棟の台所で構成されている。男と妻そして headman の居住地が明示される。

男の6棟は入口をはさむ位置に列在し、対面して妻の10棟も台所をはさみながら列在する。住居+(倉庫)+台所の組み合わせは妻、住居だけでは男と、明確に区別される。また住居+(倉庫)+台所=妻から倉庫が欠落したものは、妻でも第2婦人であり、明確に区別される。headman は、他から離れて中央に位置し、また2棟の大型倉庫を伴うことで特色付けられる。ただし、住居面積は他と比較しても大きくはない。

すべての住居面積は、径3m、7㎡程度で「成人1人=7㎡」という見積りが該当すると言う。

#### Lozi の集落 (図-3)

I. Hodder (1981, 1982) により調査された、ザンビア西部に所在の Lozi の一集落である。この調査は、pre-depositional 理論にかかわる人間の行動と物質文化の関係を追求すべく、典型的なエスノアーケオロジーの方法でなされた。

集落には、住居17棟・倉庫14棟・火所2ヶ所・ゴミ捨場4ヶ所・柵6ヶ所・乾燥棚1ヶ所が存する。南北90m・東西44mの範囲に、馬蹄形を呈して配置されている。

17棟の住居には、廃棄されたもの、居住中のもの、建設中のもの、の三者がある。

柵は住居や倉庫を囲い込み、固有の屋敷(地)を形成している。集落は、この屋敷6ヶ所、それを持たない住居4棟・倉庫13棟・他で構成されている。火所は、この内屋敷2と3の内部2ヶ所にみられる。

headman は、最大の屋敷地面積で、内部に固有の倉庫を持つことで特色付けられる。だが、住居建物の面積は他を圧することはない。headman の住居の右側には、3つの屋

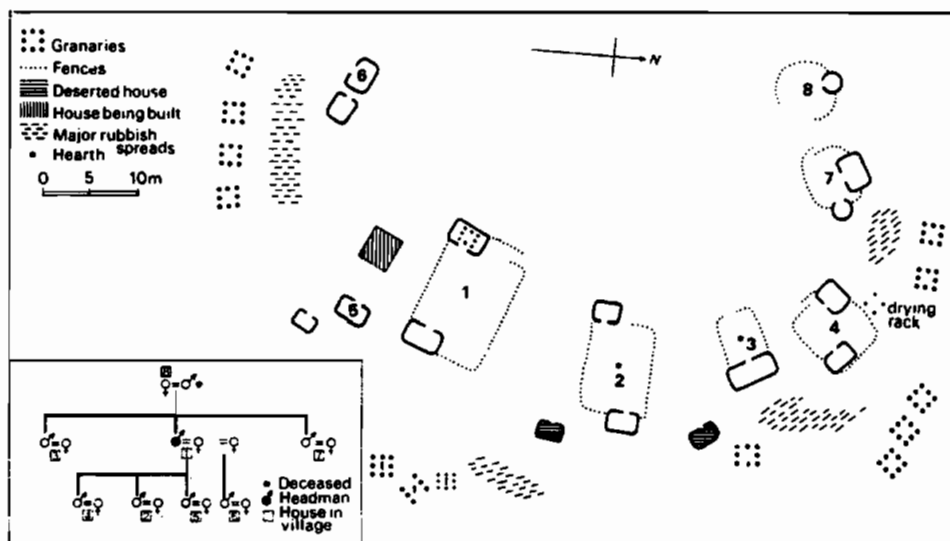


図-3 Loziの集落 (Hodder 1982)

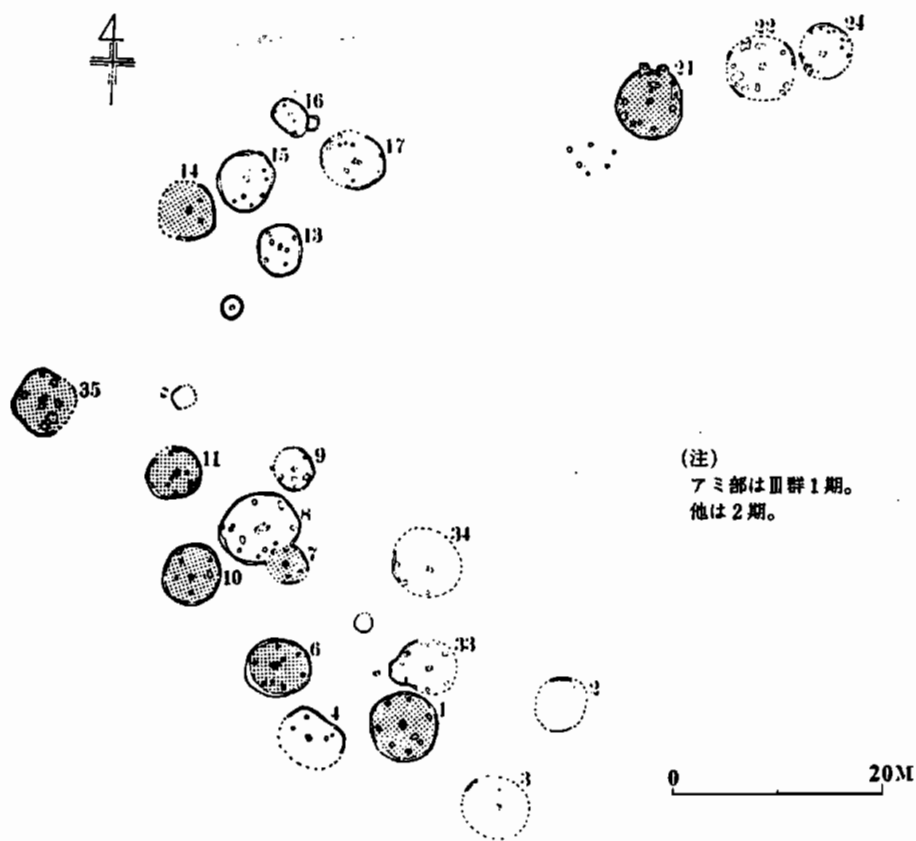


図-4 貝の花遺跡の縄文集落址 (関根1982)

敷が並存する。これらには、彼の子供夫婦2組と兄弟夫婦1組が住む、**headman** と対面する位置には、40m離れて、彼の母と彼の兄弟夫婦1組が住む、これら6つの屋敷の入口は、すべて中央広場の方へ向けていることで共通している。また屋敷地内部の建物相互も入口を向け合う。各屋敷の間隔（各中心間）は、10~18m程度で、あまり大きな隔差は認められない。

**headman** の右側には、すべて屋敷が存するに対して、左側には屋敷地を持たない住居ばかりが2ヶ所に偏在する。住居6は、屋敷地を持たず、26mと遠くに離れて、しかも入口を他と反対にした特異なあり方をする。これに対し、住居5は、屋敷地はないが、**headman** に8mと接近し、また入口を他と共通させて中央広場に向ける。前者と後者の差は、第2夫人の子供夫婦と第1婦人の子供夫婦の差と対応する。即ち、第1婦人と第2婦人の差が端的に現われていると判断できる。

なお **Hodder** (1981: 93-95, 1982: 122-124) は興味ある観察をしているので紹介しておこう。この集落内で土器を製作している3人の婦人が面接された。屋敷1に住む **headman Nkoya** の妻・**Subiya** は、この村に来る以前に彼女の母から土器づくりを習った。隣の屋敷2に住む義理の娘は、村に来る以前に土器づくりを習ったが、**Sudiya** と実によく似た土器を製する。ところが、屋敷3に住む **heaman** の兄弟と結婚している婦人は、彼女等二人を見てこの村で土器づくりを覚えたのに、全く異なった土器を製しているという。この特異な状況を、**Hodder** は、老人—**headman**—彼の兄弟という三者間の実際の反目 **antagonism** に起因すると理解している。その反目に相まって、仲の良い婦人と悪い婦人という関係の差が、製り出される土器の差となって即物的に表現されているのである。ただし注意されるのは、こうした反目の存在は、住居の配置状況には顕著に反映していない。

生活維持施設の隣接関係を見ると、住居—ゴミ捨場—倉庫の順となる。東辺にある3ヶ所のゴミ捨場は、その位置から判断して二つの屋敷で一ヶ所を共用しているらしい。

### 生活維持施設と生活集団の関係

わずか3事例の観察であったが、以下の諸点を知りえた。

(i) 先ず、住居・倉庫・火所・ゴミ捨場という基本生活維持施設のあり方は、一集落を構成して群在する内部にあっても、その組み合わせと配置状態は均等では決してなかった。そして、多様性は、主として組み合わせ、間隔、入口の方向・面積・位置・集合状況等の差に表現されていた。

(ii) これらの多様性は、生活集団内部における諸成員の立場とその複数性を反映していた。例えば、**headman** の存する集落では、彼は、住居群配置での中心 (**Messa**)、屋敷地面積の最大 (**Lozi**)、あるいは固有の倉庫 (**Messa**)により他と明確に区別され、特色付けられていた。男女の住み分けのある集落では、男=住居、対する妻=住居+(倉庫)+台所、という組み合わせの顕著な差 (**Messa**) に反映していた。妻の立場にあっても、第1婦人と第2婦人があれば、第1婦人=住居+倉庫+台所であるに対して、第2婦人=住居+台所という組み合わせの差 (**Messa**) がある例、**headman** との配置状態との差、即ち、第1婦人=入口を同じくして近接、第2婦人=入口を反対にして隔離 (**Lozi**) に表現される例があった。とりわけ強い義務と忌避関係が存する場合には、それにかかわる住居相互が一定の配置状態——接近するが、入口は向き合うことがない——(**Hodza**) に法則的に表現されている例を認めた。

以上のような諸事例は、結果として、住居をはじめとする基本生活維持施設の組み合わせや配置状況に法的な現像と差異が観察しえた場合、それが生活集団内における何等かの立場とその複数性を表現していると理解できる可能性を示唆している。なおまた、諸施設の組み合わせや配置状況にかかる現像と生活集団の実態の相対関係を具体的に特定する認識を産み出すことは全くできないが、両者に何等かの相関関係が存することだけは認めよう。例えば、

The Marakwet say that if two people build within 20m. of each other, they are almost certain to be close kin. (H.L. Moore. 1982 : 77)

にあたるような情報を、人間の観察を介さずして、諸施設の配置状況という物的資料の観察に基づいて得るのが可能となるには、なお多くの作業を要する。

### 集落址理解への適用

次に、過去の遺跡である縄文集落址の一事例をあげて、先に得た認識を参考にしつつ観察してみよう。ここでは貝の花遺跡(図-4)をあげる。

この遺跡は、千葉県松戸市に所在し、64~65年にはほぼ全域が調査(八幡他1973, 関根1982)され、かつ共存する住居群についても分析された縄文中~後期の典型的な集落址である。図示したのは、この内中期における二時期(Ⅲ群1期・Ⅲ群2期—関根1982:78)の住居址群である。

既に考古学の立場では、こうした縄文集落址の説明を試みる、例えば「水野モデル」を持っている。

「縄文前期から後期におよぶ村が六棟を基本単位としているのはなぜであろうか。先に紹介した諸遺跡(南掘・蜆塚・出口・貝の花・高根木戸遺跡—筆者挿入)の調査は、六棟という数が、実は二棟ずつの三小群からなることを教えてくれる。家の移動のしかたや、住み始め、住み終りが比較的共通し、意識しあった位置をとる二棟は、おそらく二棟で共存する必要があったのであり、二棟のうち一棟は必ず、祭式施設をそなえていた与助根遺跡の例もあることから、一棟に家長と出身を同じくする男子や子どもが居住した可能性が大きい。一棟すなわち一家族とする従来の考え方とは異なり、二棟で一家族、すなわち村は三大家族より構成されたと考えることも可能である。」(水野1969:200)

この意見は、なおまだ「仮説」の段階にとどまっているとはいえ、演繹法の立場から縄文集落址を調査・研究しようとするにおいて、これ迄提出されたものの中では最も整備されたモデルとなっている。ただし、ここにあげた貝の花遺跡の集落型態から、そうした実態の生活集団が存在したかどうかの論議は、本稿の意図するところではない。

Ⅲ群1期の住居群は、8棟で構成され、3群に分かれて、全体が馬蹄形をなす配置をとる。各小群は、次のような状況で存する。

南群——5棟で構成されるが、同規模の4棟はやや弧をなして10~13m(中心間の間隔)の等間隔に列在し、小規模な1棟は、その中央東側8mに位置する。

中群——2棟の住居址が、23mの間隔で並列する。両者の規模は似る。

東群——他と大きく(隣在住居址と43m)離れて1棟で存する。

ここで、各住居址間と住居群間の「間隔」を観察すると、次のようになる。

南群における小型住居址を最も近接する通例の住居との間隔をaとすると

1. 南群における通例住居址の間隔— $b > a$

2. 南群と中群の間隔— $c > b$
3. 中群における住居址の間隔— $d > c$
4. 中群と東群の間隔— $e > d$
5. 南群と東群の間隔— $f > e$

となっている。

すなわち、

1. 小群内における小型住居址は、通例住居に最も接近する。
2. 南群での普通住居址の間隔は、他群でのそれより近接する。
3. 中群での普通住居址は、南群での普通住居址のそれよりも離れた間隔をもつ。

また、各小群間は、

1. 南群と中群との間隔よりも、中群と東群の間隔の方が大きく、更に南群と東群の間隔の方が大きい。

これらの観察事項を総合すると、次のような推量が可能とされる。

- a. 小型住居址は、通例の住居址に最も近接していることから、通例の住居址に最も深い関係があろう。
- b. 南群での普通住居址は、他群中のそれよりも近接して存することから、普通住居址群としては最も関係深く存していたであろう。
- c. 中群での普通住居址は、南群の普通住居址群とは別に、かつやや離れた関係をもつて存していたであろう。
- d. 東群は、他群とりわけ南群とは隔離された関係で存していたであろう。

結果として、貝の花遺跡におけるⅢ群1期の集落址は、少なくとも住居の大きさと他者との距離および配置関係に反映する4者の立場を異にする住居址（小型住居・南群・中群・東群）の集合体として理解されることになる。その配列は右まわりで密→粗となる。そして、現存集落の観察で得た先の認識を、時空を異にする一般法の範囲でこの過去の縄文集落址の理解に援用すると、ここには少なくとも4つの立場を別にして関係構成されていた生活集団の存在が予測しうるのである。

## おわりに

遺構・遺物で構成される集落址の観察から、そこに存した生活集団の実態に理解が到達する迄には、遠き道程を予測しうる。現在における集落址研究を概観して最も必要な作業の一つは、まずは、「真に共存する遺構群」の確定であろうと判断している。そうした作業を可能とならしめるには、先に紹介した「水野モデル」の遺跡の上での是非の検討が有効な役割を果すことにならう。詳細な土器型式の設定作業とは別に、遺構群の共存性にもかかわる論議も強く望まれる。本稿も、そうした観点からエスノアーケオロジーの調査事例に学びながら論じた次第である。

## 文献

- Fraser, D. 1968 *Village Planning in the Primitive World*. (Fig. 52)
- Flannery, K.V. 1972 The origins of the village as a settlement type in Mesoamerica and the Near East: A comparative study. *Man, Settlement and Urbanism*. P.J. Ucko, R. Tringham, G.W. Dimbleby eds. 23—53
- Hodder, I. 1981 *Society, economy and culture: an ethnographic case study amongst the Lozi*.



- Pattern of the Past*. I.Hodder, G. Issac, N. Hammond. eds. 67—95.  
1982 *Symbols in Action*.
- 水野正好 1969「縄文の社会」『大地と呪術』299—202.
- Moore, H.L 1982 The interpretation of spatial patterning in settlement residues. *Symbolic and structural archaeology*. 74—79.
- 酒井龍一 1976「弥生社会の体系的理解に関する認識論」『大阪文化誌』5号 1—10.  
1977「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕」『考古学研究』24巻 2号 52—69  
1982A「集落址からみる人間の精神構造—行為観察のチェック・ポイント」『歴史公論』82. 97—103.  
1982B「畿内大社会の理論的論的様相」『亀井遺跡』239—251.  
1983「Settlement archaeology: その考え方と手法」『文化財学報』2巻 1—20.
- 関根孝夫 1982「貝の花貝塚」『縄文文化の研究』8 73—83.
- Woodburn, J. 1972 Ecology, nomadic movement and the composition of the local group among hunters and gathers: an East African example and its implications. *Man, Settlement and Urbanism*. P.J. Ucko, R. Tringham. G.W. Dimbleby eds. 193—206.
- 八幡一郎他 1973「貝の花貝塚」

### Summary

The author has made some preliminary discussions for studying on archaeological settlements. This is a note to get useful suggestions from the three ethno-archaeological investigations of present settlement: Hadza, Messa, and Lozi, recognizing the meanings of their village components.